

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲口 乙口 口修	第 387 号	氏名	中道 敦子
審査委員	主査 松香 芳三 副査 日野出 大輔 副査 吉村 弘			

【 題 目 】

Relationship between mouthful volume and number of chews in young Japanese females

(日本の若年女性における一口量と咀嚼回数との関係)

【 要 旨 】

本論文は、「一口量を減らすこと」が「咀嚼回数を増加する」という仮説に基づき、一口量と咀嚼回数の関係を検討した報告である。意義ある着眼点として、1点目は一口量の定義を「食品を口に含む大きさ」とし、各食品の比重（米飯 1.12g/cm³、りんご 0.84g/cm³）をもとに体積に換算した点である。日常の食行動では、過去の経験や口腔の処理能力から一口量を視覚的に判断している事を想定した報告であることが他の研究と異なる意義を持つと評価した。2点目は咀嚼回数への一口量の影響を体積あたりに咀嚼回数に換算し、実際に食品をよく噛んでいるかどうかについて検討した点である。“よく噛むこと”に照準をあて、対象食品の大きさを単位とした咀嚼回数で検討した点に特色があり評価できる。

研究方法は健常な若年女性（平均年齢 19.5 歳，平均 BMI 20.2Kg/m²）50 人を対象とし、日常口にすることが多く物性の異なる食品として米飯，りんごを用いて被験者ごとの一口量と咀嚼回数の関係，被験者個人の口に含む量を変化させた条件下での一口量と咀嚼回数の関係を検討した。その結果，各被験者の一口量と体積あたり咀嚼回数の間には負の相関があり，“よく噛むこと”と“口に含む大きさ”の関係が明らかになった。すなわち，物性の異なる食品両方で一口量が多い者ほど実質的にはよく噛まない事が示唆された。さらに，この被験者個人において，米飯，りんごとも 0.5 口量，1 口量，1.5 口量と一口量の変化に伴い咀嚼回数は増加したが，体積あたり咀嚼回数では，二つの食品とも一口量が増加するに従って減少した (p<0.017)。この結果から，もともとの一口量が違って「個人の一口量を少なくして食べること」が「咀嚼回数を増加してよく噛んで食べること」につながる事が示唆された。

本論文は，Impact Factor: 2.520 を有する国際誌に掲載されており，保健指導などで対象者が自己の食行動の認識を深め，“食品をよく噛んで食べる”ために実践できる方法の一つとして「一口量を減らすこと」を提示できるもので，社会的意義が期待できる。

論文中には，研究倫理に関して倫理審査委員会の承認を得たことが明記され，研究の計画，実施，成果報告まで適正に実施されていると判断した。